■研究十二月往来〈209〉

舎利の夢――『多聞院日記』から――

岩崎雅彦

能「舎利」（記録上の初出は寛正五年〔一四六四〕。『蔭涼軒日録』）の成立からはかなり時代が下るが、十六世紀末の奈良に、舎利の夢を繰り返し見た人物がいた。興福寺の学侶で多聞院主であった英俊（一五一八～九九）がその人である。英俊の日記である『多聞院日記』には、彼が見た夢に関する記述が多く見られる（芳賀幸四郎氏「非合理の世界と中世人の意識」『中世文化とその基盤』昭和37）。その中で舎利に関するものは五十ほどあり、そこからは一人の中世人の舎利信仰に対する意識が具体的に見えてくる。そうした中から特に興味深いものをいくつか挙げてみよう。

◆永禄12（1569）・4・17

今暁夢ニ（中略）其後恵心坊ヨリ（図あり）コレホドナル虎珀ノタマノ様ナル香バコノスキトヲリタルニ、御舎利数多入テ、殿ノナリハ（図あり）カヤウナル六角ナルニ入テ、愚身ヘ給ト見了。舎利ハアワホド也シ。アマタアリシ也。コボレタルヲモヒロヰ入ルト見了。

恵心坊から、透き通った琥珀の玉のような香箱に舎利を多く入れ、それを六角の舎利塔に入れて授かった。舎利は粟ほどの大きさで、こぼれた舎利も拾って入れた。楕円形の香箱の図と、足の付いた台に載った舎利塔の図が描かれている。舎利は釈迦の遺骨・遺歯のことであるが、舎利信仰の拡大に伴い、水晶の玉などを舎利と称して各寺院が祀っていた。舎利は舎利容器に入れ、これを舎利塔に収めて舎利殿に安置する。

◆天正2（1574）・正・16

昨夜夢ニ、両面ノ舎利典五寸四方ナル梵字ヲスゲタルニ、舎利入テ上ニ一寸余ナル大黒在之ヲ亥剋ノ程ニ夢見。（中略）又妙ノ丑寅ノ角ノ縁ノ下ヨリ、狐一出ヲタヽク処ニ、立帰テカブラントスルヲ、左ノ手ニテクビヲトラヘテヒ子リ、右ノ手ニテ尾ノ先キノ白ヲ福也ト思ヒ取テ、懐中ト見テ夢覚ニ、九ツノ鐘ナル。

梵字を刻んだ五寸四方の両面の舎利塔に一寸ほどの大黒の像が載っているのを見た。また北東の縁の下から狐が一匹現れ、これをたたくとかみつこうとするので、左手で首を押さえてひねり、右手で尾の先の白い毛を福と思い抜き取り懐中した。狐は英俊の信仰していた荼枳尼天の使いで、彼はこうした夢を何度も見ている。荼枳尼天は福徳を授ける神で、弁財天や大黒天とも習合して信仰された。この夢では舎利塔の上に福神の大黒が載っているが、舎利信仰もこの時代には純粋な仏教信仰・釈迦信仰というよりは、現世利益的な側面が強く、舎利は福徳をもたらす一種の呪宝と見なされていた。英俊は舎利の夢と狐の毛を抜き取る夢を何度かセットで見ているが、これもそのあたりの事情を反映したものだろう。彼は他にも福神の毘沙門天や弁財天の使いである百足や蛇の夢も多く見、そのたびに喜んでいるが、舎利の夢もそうしたものと共通した性格のものである。

◆永禄12・10・15

昨夜丑剋計歟、夢ニ家ノ焼跡ヲ行ニ、金銭少シ在之間拾之。ハヰノ中ヲ見レバ丸サ一寸ほどなる水精ノ鏡ニカナ具アリテ、香箱ノヤウニテ、中ニ金色ノ御舎利数粒在之。拾之則見レバ之又同様ナル在之。三ツマデ拾之。炭之中ヲ見レバ大少ノ御舎利在之。拾テ左ノ袂ヘ入ト見了。

家の焼け跡を歩いていると金銭が少し落ちていたので拾った。灰の中を見ると直径一寸ほどの水晶の鏡に金具があり、それが香箱のようになっていて中に金色の舎利が数粒あった。同様の物を三つ拾い、また炭の中に大小の舎利が落ちていたのを拾って左の袂へ入れた。焼け跡から金銭と舎利を同時に拾っているのは、やはり舎利が富をもたらすものと認識されていたからだろう。もし現実に焼け跡から拾った物を着服したならば犯罪であろうが、英俊にはあからさまに舎利を盗んだ夢もある。次の二件がそれである。

◆天正13・4・29

今朝六ノ過ノ夢ニ、所ハ常如院歟ニテ、

弁財天ノ宝殿アリ。後ロヨリ開テ見レバ、天女ノ神躰ト覚テ、八角ニハリタル廻五寸・長五寸ホドナル物アリ。上ニハ木ニテ作タル三寸計ナル錫杖ヲツル。御身躰ヲユルガスレバ、御舎利也ト見ハリタル内ニ、丸サ五寸・長三寸計ナル水精ノツヽノ様ナルアリ。座付ヘ甘テ動ク間、盗取ントスルニ、盗犯如何ト思シニ御舎利ナレバ不苦ト思テ、ウスキ帋ヘウツセバ、五十粒計白色ノ細カナル舎利出ル。ノコリヲバ本ノ如ニ入テ、厚キ帋ニツヽミケルニ、大ニナリテウスヾミ紺青色ニナリテ十五六粒アルヲ、ヨクツヽミテ懐中ニ。ソバニ実賢房僧都ト今一人アリシガ、「感得セン」ト申サルヽ間、与ント思シニ、西ハシノ院専賢房僧都来ル間、隠スト思ヒテ夢覚了。無比類好夢。一入歓喜々々。

常如院らしき所に弁財天の宝殿があり、開けてみると舎利がある。盗みはいかがかとためらわれたが、舎利なのでかまわないと思って薄い紙に五十粒ほど取り、残りは元に戻した。白く細かいその舎利を厚い紙に包むと大きくなって十五、六粒になり、薄墨色・紺青色になった。そばに実賢房ともう一人、人がいて自分も舎利を感得しようと言ったので舎利を与えようと思ったが、そこに専賢房がやって来たので舎利を隠した。この記事は前掲芳賀氏論文に紹介されている。舎利は盗んでもかまわないというのは、あくまで英俊個人の、しかも夢の中での思考であり、当時一般にそう考えられていたわけではなかろうが、それにしてもこのような考え方があったことは注目しておく必要がある。英俊はこの夢を比類無きよき夢と記し、歓喜している。

◆天正20・2・16

過夜夢ニ、英繁法印ノ守ノ舎利、水精ノ玉ニ入ルヲ、三粒取テ、口中ニ入テ隠ト見了。

これは英繁法印が守りとして所持している舎利を盗んだ夢。口に入れて隠すというのが、妙に現実味がある。舎利は僧がこのように個人でも所持していたらしく、次の記事もそれを物語る。

◆天正16・閏5・13

昨夜夢ニ、クボノ塔ノ辺ニテ金著ヒロフ。中ニ舎利帋ニツヽミテアリ。慶真専当ヲトス。則慶真ニ尋ニ、「我等ノキンチヤク也。舎利我身ノ也」ト申ス。「ヒロヒタレドモ可遣也。然バ舎利一粒可取之」由申ス。則披テ見レバ五六粒アリ。一二粒可取ト見テ覚了。

窪の塔の辺りで巾着を拾い、中を見ると紙に包んだ舎利が入っていた。慶真に尋ねたところ、自分の巾着で、舎利も自分のものだと答えた。英俊は巾着を返す代わりに舎利を一粒要求し、五、六粒のうちの一、二粒を取った。巾着に舎利を入れて持ち歩いているのは、銭が増えるようにとのまじないに違いない。

◆永禄12・正・14

暁夢ニ、愚身所持ノ天女ノ内ノ瑠璃ノツボヲ、殿ノ前ニ取出テアリ。奇ク思ヒヨリテ見レバ、口ノ符ヲトキテアリ。アケテ見ルモ何もナク、能々ツボト思ヒシヲ見レバ丸キヘウタンニテ、中ニ白キマメノ様ナル物計也。浅猿ク思テ能々尋レバ、又香箱ノ御舎利皆失テ何モ無之。是非ニ長勝房沙汰ニテ取ケルト申かけ、とらへて色々尋。扨も命とともにと思ケル御舎利ヲ失ケルト、涙ヲ流しけると見て夢覚了。一段大凶事なる夢也。沈事〳〵。但し夢也。

英俊が所持する弁財天の瑠璃の壷が殿の前に取り出してあるので不思議に思い見ると、口の覆いが解かれて中は空で、壷は瓢箪に変わった。また香箱の舎利がなくなっており、長勝房が盗んだと見た英俊は、これを捕らえ尋問した。英俊は命と同じくらい大切にしている舎利をなくし涙を流す。この夢では英俊は逆に舎利を盗まれ落胆している。舎利に対する執着心のほどが窺われる。彼はこの夢を一段大凶事と記し、最後に自らを落ち着かせるように「但し夢也」と書き添えている。

◆天正7・11・4

今暁夢ニ、英繁法印所住ノ処ニ本尊数多、中尊ハ座像ノ文殊一尺五寸ホド御口ヲ開アザヤカニ在之。前後ハ小仏計数多在之。胤継律師ソバナル三妙ノ舎利典へ、我所持ノ舎利一粒可入トノ間出之処、一粒と申サレシガ十粒余入。紫糸ノ御舎利数多在之見了。夢ナガラ滅罪生善ノ基、貴キ事也。

英繁法印の寺に文殊菩薩を始め仏像が多くある。胤継律師が舎利塔へ英俊の所持する舎利を一粒収めるよう勧めたのでこれを渡したところ、一粒と言ったのに十粒余り入れてし

まった。英俊は夢ながら尊きことだと記しつつも、舎利を多く取られたことを惜しんでいるのが微笑を誘う。

偸盗戒を保っているはずの僧にとっても、舎利は盗んででも手に入れたい物であった。能「舎利」では前シテが舎利を奪い去った後、アイがワキの僧が舎利を盗んだのではないかと疑うが、これは決して突飛な設定ではなく、あり得べき現実を踏まえていることになる。泉涌寺では延文四年（一三五九）に実際に舎利の盗難事件が起こっているが（熱田公氏「泉涌寺と『舎利』」『観世』昭和56・7）、帝釈天に「その牙舎利、置いて行け」と言われた足疾鬼が「この仏舎利は誰も望みのあるものを」と言い返すのは、こうした中世人たちの舎利に対する所有欲を代弁したものと言えるだろう。

（法政大学能楽研究所所員）